

〈時評〉

さらば、人文研

——ある移民記録映像作家の孤独——

岡 村 淳

(1) 岡村取材殺人論

「オカムラクンに撮影されると、みんな早死にしちゃうんだよ。殺されたらたまらんから、僕は撮影を断ってるんだよ」。ブラジルの日本人移民史、日系人についての調査研究を専らにする在ブラジルの民間の研究機関・サンパウロ人文科学研究所（略称・人文研）の宮尾進顧問の言である。「僕が撮影して殺せるんなら、まず〇〇（ブラジル日系社会のさる自称・権威者の名前）を撮ってますよ。それに僕は自分が美しいと感じたものしか撮りませんから、宮尾センセーはどうぞご安心ください」。私の同席した場での「岡村殺人」発言にはこのように斬り返しているが、宮尾氏はこの10年来、何度となく同様の発言を私以外の人にもしつこく繰り返している。商業の世界なら、営業妨害ということになろう。本稿では私の日常活動を紹介しながら、この宮尾発言の信憑性を検討する素材を提供したい。

宮尾氏は1930年にブラジルに生まれた日系二世だ。人文研の所長を長年にわたって務め、現地ブラジルでの日系社会研究の第一人者とされ、人文研の顔というべき人物である。ちなみに宮尾氏が「もうカンベンしてくれ」と所長を辞して久しいが、現在も所長の座は空席であり、研究所と称しながら、専任研究員も不在の状態が続いている。

さて、私は学者でも研究者でもない、いちフリーの記録映像作家である。ところが私は知らないうちに、この人文研の理事にされてしまった。辞令

の紙切れ一枚ちょうだいした訳でもないのに、正確な期日を知る由もない。5年ほど前だろうか、訪日からブラジルに戻ると、宮尾氏から連絡があり、「キミに理事になってもらったから」とおっしゃる。理由や経緯の説明もない。その際、理事としての仕事と義務を尋ねてみた。すると「人文研の会費を払うこと。人文研の会員を増やすこと」とのこと。そもそも人文研の会員になっても、会費を払えという便りが来るだけで、当然あるべき活動報告・決算報告すら送られてこず、何のメリットもない。さすがにそんなところへの会員勧誘はできない、と申し上げた。すると、自分の会費を払うこと、人文研のためにアイデアを出すこと、と条件を変更された。宮尾氏以前の人文研所長、故・斉藤広志氏と私の大先輩である日本のテレビディレクター、故・豊臣靖氏が懇意だったという歴史も考慮して、とりあえずお引き受けした次第である。ブラジル日系社会の人材不足、ここに極めり、である。

（2）移民記録映像作家の日常

自慢するつもりも卑下するつもりもないが、私はこれまでブラジルを始めとする南米の日本人移民とその子孫を主人公とするビデオ・ドキュメンタリーを数十本、制作してきている¹⁾。これらの作業は、誰に依頼されたのでも命じられたのでもない、あくまでも記録映像作家・岡村淳個人の発意と責任による所産である。他の追隨を許さないというより、今後とも誰も追隨する気も起こらない作業といえよう。

今年2008年のブラジル日本移民百周年記念のバブル効果を当て込んだ、にわか移民記録者とは、ちょっと異なるつもりだ。こちらは、よりよいドキュメンタリーの制作を志して日本のドキュメンタリー制作会社を辞して自ら移民となった、いわばドキュメンタリー移民である。今から20年前、ブラジル日本人移民80周年記念の年にはすでにこれまでのステレオタイプを逃れた日本人移民をテーマにしたドキュメンタリーを2本制作して、日本のテレビで放送している²⁾。

昨今の私の活動のサワリを紹介してみよう。この原稿は、サンパウロ市からパラグアイ国まで、2200キロメートル以上の走行距離を自ら運転、さらに道中の撮影をこなした一週間の旅から帰還した翌々日より、締切りに追われて書き出している。この旅は在ブラジルの日本人移民の植物学者・橋本悟郎さんから、私に「最後のたつてのお願い」として依頼されたものだ。

橋本さんは現在、95歳である。日本の静岡県で生まれ育ち、未知の植物への憧れと軍国化する祖国への忌避から、1934年、21歳の時にブラジルに渡った。以来、70年余りにわたって在野の植物学者としてブラジルの植物の収集と分類研究を続けている。

私は1996年以来、これまで3本の橋本さんを主人公としたドキュメンタリーを制作している³⁾。サンパウロ市郊外にお住まいの橋本さんは、日本食の購入や雑用などにも難儀をされている。私はサンパウロの自宅に腰を落ち着けている期間は週に一度程度、片道が車で1時間以上かかる橋本さんのところに通ってお世話をさせていただいている。宮尾氏の提唱する「岡村殺人」論に反して12年にわたって家族同様のお付き合いの続く橋本さんをご健在であり、次の旅行の検討も始めておられる。

ちなみにテレビ・ディレクター時代からの岡村作品に最多出場しているのは、ブラジル・マットグロッソ州在住で山口県出身の溝部富男さんで、これまで5本の拙作でご紹介させていただいている⁴⁾。現在、80歳の溝部さんとのお付き合いは20年以上におよび、すでに私の親戚のような存在だが、宮尾発言に反して、溝部さんもご健在だ。

この旅からサンパウロの拙宅に戻ると、日本からひとつの訃報が届いていた。旅の最後は携帯電話の圏外にいたため、タイムラグが生じてしまった。亡くなったのは、ちょうど10年ほど前、私に第二次大戦前にブラジルへ移住した姉の一家のドキュメンタリーの制作を依頼した女性で、享年91歳だった。訃報を電話で伝えたのは故人のお嬢さんで、私に訃報を電話のかかりにくいブラジル内陸のミナスジェライス州の農場に暮らす故人の姉

の家族に伝えて欲しい、という依頼だった。私は4年の歳月をかけてこの姉夫妻の記録を行ない、西暦2000年に「ブラジルの土に生きて」と題したドキュメンタリーにまとめて発表している⁵⁾。この姉・石井敏子さんは昨年2007年7月に亡くなられた。享年96歳だった。この訃報を日本の親戚に伝えるお役を仰せつかったのも不肖・私だった。ちなみに敏子さんの夫の石井延兼さんは、1999年に89歳で他界されている。

作品にエンドマークを施してから、被写体となってくれた人たちとどのように関わるかこそが、ドキュメンタリー作家の大切な課題だと私は思っている。私は「ブラジルの土に生きて」の完成後も折に触れてサンパウロから700キロ離れた敏子さんの住まう農場に自家用車や長距離バスで通い、かつて彼女が長年暮したサンパウロの人たちの近況を伝えるなどをさせていただいていた。敏子さんが亡くなられる数週間前にも、夜行バスと田舎のバスを乗り継いでお見舞いに行きかけた。晩年は車椅子に就いていた敏子さんは、日本人の見舞い客がほとんどいないこと、日本語の話し相手がないこと等をこぼされていた。私は石井さん夫妻が創設以来、運営に尽力されたサンパウロの日系キリスト教会の関係者や、夫妻がかつて面倒を見られた、40年以上前に日本の建設省主管でブラジルに派遣された「青年」グループに、さんざんお世話になった敏子さんの意識がはっきりしているうちに見舞いに行くことを強く勧めたものだが、寡聞にしてそれに応じた人を知らない。もっともこんなエピソードを披露しても移民研究の重鎮・宮尾氏なら「オカムラクンが見舞いに行ったから、彼女は殺されたんだ」ぐらいをおっしゃるかもしれない。

さて、2月末に迫った訪日の前にこの原稿を書き上げなければならない。日本では拙作の上映と講演等で連日、各地を回らなければならないため、とても執筆の余裕はない。もうひとつだけ、私と取材対象となってくださった方々との近況を記しておこう。私が自主制作活動を始める前の、テレビ放送作品時代の代表作として少なからぬ人々から評価していただいている「60年目の東京物語 ブラジル移民の里帰り」⁶⁾の主人公の森下妙

子さんである。森下さんは現在、サンパウロ州グアルーリョス市の「憩いの園」に入居されている。「憩いの園」は1958年に設立された日系人を対象とする老人ホームだ。

1995年、当時80歳だった森下さんは、日本海外移住家族会連合会のあっせんする「海外日系人訪日団」制度により、移住後60年目にして初めて祖国に里帰りをするのがこがなかつた。その森下さんに同行して、私自身が森下さんの希望に沿って旅のお世話をさせていただきながら撮影を行なつたのが、この作品である。日本で生き別れとなつた三つ違いの姉との60年ぶりの再会、消息不明となつた養母の足跡探し、出稼ぎに行つた娘を訪問する、といった、想定以上のまさしくヤラセ抜きドラマが展開された。そして森下さんという自分の感情に素直な絶妙なキャラクターに恵まれ、この作品は東京のローカルテレビ局で放送された作品ながら、何度も再放送をされて、映画館でも公開されている。ブラジルにも移民にも縁もなければ興味もなかつた若者たちの心を動かし、「生きる力をいただいた」といったドキュメンタリー屋冥利につきるコメントを今日でもいただいている。

今回の訪日時にも何ヶ所かでこの作品の上映が予定されているが、上映のあと、私が観客の皆さんに森下さんが今もご存命であることを告げると、決まって会場から、特に女性陣から感銘と安堵のどよめきが生じている。森下さんは現在、92歳。日中は車椅子につかれています。これまで拙作を通して、私も観る人たちも森下さんから生きることの励ましをちょうだいしてきた。いまや少しはそのお返しをさせていただく時だ。彼女自身と、彼女のライフヒストリーを記録した私しか、もはやこの世にある人では知りえない彼女の日本時代の記憶を、園内を車椅子で散歩しながら反芻している。

最近の私と被・取材者の近況の主だったところを記すと、ざっとこんなところである。たまたま齢90代の人たちのことが続いたが、なにも私は宮尾説に反発して、岡村の取材対象は長生きをする、というような主張をす

るつもりはない。私にとって、人を記録させていただくということは、取材を離れたこういうお付き合いを喜びとさせていただくことなのである。

私は、いちフリーの記録映像作家であり、科学を標榜するつもりも学問を云々するつもりも毛頭ないが、ここ数日のささやかな活動を記しただけで、人文「科学」を標榜するブラジルの移民研究の重鎮による冒頭の「岡村殺人発言」の無責任かつナンセンスな非科学性をお察しただけだろうか。私はかまわない。快く私の被写体となってくださった方々、そして私の作品を応援してくださる方々の尊厳のために、物申す次第である。

人間は、生物学的にはいつか必ず死ぬ。そうした人間個人を対象とする作業を続ける以上、いずれ対象が死ぬか、その前に自分が死ぬことになる。私の友人である在ブラジルの写真家から、こんな悩みを打ち明けられたことがある。「ボクの撮影した人は、ホントに早く死んじゃうんですよ」。彼の作品も誠実な人柄も評価する私は、こう励ましておいた。「人間はいつか死ぬんだし、なにか大きな意志が、その人の写真を撮らせてくれたと考えてもいいんじゃないかな。その人がこの宇宙に存在していたこと、そしてその人の命の輝きの刹那が、君の写真と存在を介して、その人をまったく知らなかった人たちにも伝わるのって、すばらしいことなんじゃないかな」。

彼や私などのしている仕事は、金銭的には報われない持ち出し状態がほとんどで、お互いよく生き続けていると思う。私たちの活動を支えているのは、記録する側とされる側の魂の共鳴であり、両者のいのちの叫びであり、さらに記録する者同士の間での共感と創造的な切磋琢磨の精神だと思う。

こうした個人制作者・記録者に対して、励ましや援助を行なうどころか、無責任な誹謗中傷を繰り返す権威、研究者がいるというのは、低迷を続けるブラジルの日系社会を象徴している観があり、あまりに悲しい。

「岡村殺人」発言の宮尾進氏のこれまでの研究といえば、管見に触れるのは、ブラジルの新聞に発表される大学入試の合格者のリストの苗字から日系人とみられる人間を数えだして、全体の何パーセントを占めるかを算

出したり、ブラジルの国内線の飛行機事故の死者のリストから同じように日系人らしき人の数を割り出して、ブラジルにおける日系人を論じるといったものである(宮尾 2002; 2007)。フィールドワークを放棄した、いわばアームチェアの日系研究であり、見事なまでの数字フェチである。必要とされるのは数であって、そのひとつひとつの抱える、大学に合格した生身の日系人の喜びや、あらぬ航空事故で果てた人間の無念さや遺族の痛恨の念といった、ヒューマンな感情の立ち入る余地などはあるべくもない。こうした地味な数の計算作業にはご苦労様、と申し上げるのがマナーだろうが、宮尾流に習ってみると「ミヤオは飛行機が落ちて死んだ気の毒な日系人の数を数えて、悦に入っている」といったところになるだろうか。

(3) 人文研と袂を分かち

さて、私は宮尾氏に対して恨みがあるわけでもないし、反対にそのよく言って反骨精神、悪く言えば不器用・無骨さに好感を持ち、敬意の念も抱いている。それがあつたからこそ、知らないうちに人文研の理事とされていたことも事後承諾して、私にとっては高額の会費も納め続けてきた。

しかし宮尾氏が「岡村殺人発言」を繰り返す以上、きちんとこちらも反論する必要を覚えていた。近年、闘病生活を続けていた宮尾氏が快方に向かっているとうけたまわり、宮尾氏が岡村が撮影することもないまま(これは今後ともありえないが)、鬼籍に入られる前に氏の反論(ないし反省)の機会を謹呈することも考慮して、その発言のナンセンスさをこの場で明らかにさせていただいた次第である。

私が完成させた作品に登場していただいた方々や、拙作を支持してくださっている方々には取るに足らないか、怒りを誘うばかりの宮尾発言だが、これが思わぬ効果を示したとみられる事態が昨年、生じている。

一昨年、絶滅の危機に瀕しているとも、脳死状態とも言われていた人文研を蘇生させる方法ありや、という深刻な会議が役員や関係者を集めて何度か開かれた。長年にわたって後進を育てることを怠ってきたツケが回っ

てきたわけだ。私は仮にも理事とされた身として、老役員たちが人文研の存続と活性化をを望むなら、自分にできそうなこととして2点の提案をした。

ひとつは人文研のホームページの立ち上げであり、実現した場合は各国にまたがる私の友人・知人にも寄稿を呼びかけ、私自身も駄文を寄せる覚悟をしていた。

もうひとつは、人文研そのものを描くドキュメンタリーの制作である。ただの歴史の絵解きでは、作り手にも視聴者にも面白くもないだろう。私の専らとするヒューマン・ドキュメンタリーの手法を生かす方法は、ないだろうか。私が思いついたのが、人文研の顧問であり、宮尾氏をしのぐ古参である脇坂勝則氏のライフヒストリーの聞き撮りである。このアイデアは、私が打診した人文研関係者たち全員の賛同を得た。脇坂氏は自らを語ることも書くこともされていなかったが、幼少の時に家族に連れられてブラジルに移住してコーヒー農場を転々としたこと、第二次世界大戦前のサンパウロの日本語新聞社で「小僧」として働いていたこと、さらに第一回のブラジル移民船「笠戸丸」の移民で後に日本語新聞を発行した香山六郎の娘婿として香山と同居していたことなど、移民記録者の興味をそそる歩みをされていることがわかってきた。こうして脇坂氏本人との話し合いで同意を得て、私はインタビューと撮影を開始した。

ちなみにこうした作業に必要な経費のことを心配するような大人は人文研関係にはひとりもおらず、すべて私の持ち出しによる作業である。最初の取材にあたって脇坂氏の語る人文研史は、書いたものを読んだ方がいいレベルのもので、とてもプロとして関係者以外に見せられる代物ではなかった。そうした脇坂氏から観る者に人間としての共感を覚えさせるものを引き出すことが、私に課せられた。撮影済み内容の再検討、関連資料のチェック、そして関係者のアドバイス等々をもとに週に一回、撮影時間一時間程度のインタビューを重ね、少しずつだが「撮れた」と思えるシーンを重ねていった。

ところが脇坂氏は取材の約束をすっぽかし始め、別の理事に私による取材が「つまらない」「くだらない」ともらし始めたのだ。私は直接、改めて脇坂氏と話し合い、この記録の大義を説いて、脇坂氏の取材継続の約束を取り付けた。そんな折に宮尾氏の「岡村殺人」論が、脇坂氏と私の前で展開されたのである。とたんに脇坂氏の表情が曇り、引きつっていくのを私は記憶しているし、その場面の撮影もしている。そして再び脇坂氏のすっぽかしが行なわれたのである。

私の記録作業は、お互いに対する敬意を基にしなければ成立し得ない。他の仕事と家事の調整をして持ち出しの記録作業に臨み、再度の話し合いで合意をしておいてのこの仕打ちは、あまりといえばあまりである。私にとって人間として尊敬に値しなくなった対象の記録は、もはや成立し得ない。こうしていくつかの関連シーンも含めた10時間近い撮影素材はお蔵入りとなった。この脇坂氏のケースのように、岡村がある程度、撮影はしたものの、作品としてまとめていない場合、いわば「半殺し」状態の場合の人の運命はどう解釈するのか、宮尾氏にぜひうかがいたいものだ。

最後に私自身が立ち上げに関わった人文研のホームページにまつわる笑い話を披露しておきたい。そもそもインターネットと聞くだけで不機嫌になるような固陋の古老役員たちを説得するのがひと苦労だった。さて、いざホームページの開設となると、圧倒的に書き手が不足している。私は打ち合わせの席で鈴木正威理事から、ホームページ用の原稿書き下ろしを依頼された。

私を書くとなると、権力側の悪の告発などの内容となり、筆致もきついものになることを念を押して、それでもかまわないかを鈴木理事に確認した。鈴木理事はかまわない、自分が責任を取るからどんどん書いてくれ、と答えた。他のメンバーも立ち合いのものと発言である。

私はすでに私の公式ホームページで告発していた事件を改めて人文研理事として訴えることにした。日本のNHKのスタッフが、(2)で紹介した在ブラジルの植物学者・橋本梧桐さんの取材にかこつけて、1997年に橋

本氏所有の資料を多量に持ち出し、返却を拒むどころか局外の移民研究者や出版社に横流しをはかっていた、という犯罪行為である。私は2005年に橋本さんから「このままでは、死んでも死に切れん」と強い依頼を受け、NHKの問い合わせセクション宛に筆記の不自由になっていた橋本氏の代理として、この件に関して問い合わせを行っていた。しかし今日までNHK側はこの横流し問題についてなんら答えようとしていない。

この原稿は人文研のホームページ編集担当者の喝采を受けたが、鈴木正威理事から横やりが入った。「こんな個人の問題を載せるわけにはいかない」と言うのだ。移民の資料を日本を代表する放送局が不正に流出していることを訴えるのが、どうして個人の問題なのかの問いには答えようともしなかった。

私の映像記録も文章表現も問題の告発もおとしめられ、否定されながら、ヘラヘラと会費だけを払い続けているわけにはいかない。私はこの原稿が掲載されない以上、人文研理事を辞退して退会させていただくよう、昨年1月に鈴木正威理事に言い渡してある。ちなみに人文研のホームページに掲載を拒否された拙稿は、そのまま私の公式ホームページに掲載してある⁷⁾。

この後、サンパウロの邦字新聞に興味深い記事が掲載された。見出しにいわく「不心得な利用者に嘆く人文研」「借りても返却の意思なし」「研究にも響く研究書紛失」。人文研の資料散失問題が、先述の鈴木正威理事らの発言をもとに訴えられている（『サンパウロ新聞』2007年11月7日）。他所の移民資料の犯人の明らかな横流しの告発は揉みつぶし、ご自分のところの資料管理のがさつゆえの散失問題は邦字紙に訴えて記事にさせる。

百は百でも、百鬼夜行のブラジル日本移民百周年記念に仇花を添えているといわざるを得ない。さらば、人文研、である。

(4) あとがき

本稿のメインをなす宮尾氏の「岡村殺人」発言批判については、人文研

のホームページに軽い読み物として寄稿するつもりだった。しかし、前述の通り、別の依頼原稿の掲載拒否に遭い、機を逸していた。今回、本年報編集部から「移民100年を迎えたブラジル日系社会の現状を紹介」する内容の寄稿を懇願されたため、返り血を浴びるのを覚悟の上で書き上げた次第である。

さて、本稿の初校ゲラのチェック時に、追記すべき事態が生じた。人文研の発信するML「サンパウロ人文科学研究所便り 2008年3月26日(水)」により、人文研の3月13日付の役員改選を初めて知ることになった。事前・事後の何の通知もないまま、役員から私の名前は「晴れて」削除されていた。いかにも、人文研流である。

もう一度、繰り返そう。さらば、人文研。

註

- 1) 岡村淳公式ホームページ「岡村淳のオフレコ日記」<http://www.100nen.com.br/ja/okajun> 中の「テレビ放送作品紹介」「自主制作作品紹介」を参照。これらにはディレクター（構成、演出）のみを務めたものは含めていない。
- 2) 岡村淳（ディレクター）「シネマこそわが人生 活弁ブラジルに行く」「旅芝居こそわが人生 ビバ！ブラジル移民」（『すばらしい世界旅行』日本テレビ、1988年放送）。
- 3) 岡村淳（構成・撮影・編集・報告）「花を求めて60年 ブラジルに渡った植物学者」（『VIDEO EYE』朝日ニュースター、1996年放送）。
岡村淳（制作・構成・撮影・編集・報告）「パタゴニア 風に戦ぐ花 橋本悟郎南米博物誌」（2001年）、自主制作。
岡村淳（制作・構成・撮影・編集・報告）「ギアナ高地の伝言 橋本悟郎南米博物誌」（2005年）、自主制作。
- 4) 岡村淳（ディレクター）「南米ナゾの岩絵地帯に行く モンゴロイド5万年の旅」（『新世界紀行』TBS、1991年放送）。
岡村淳（構成・撮影・編集・報告）「太平洋戦争は日本が勝った！ ブラジル最後の勝ち組老人」（『フリーゾーン2000』衛星チャンネル、1993年放送）。
岡村淳（構成・撮影・編集・報告）「大東亜戦争は日本が勝った！ ブラジル最後の勝ち組老人」（『映像記者報告』東京メトロポリタンテレビジョン、1996年放送）。

岡村淳（映像提供・出演・報告）中根健（構成）「第二の祖国に生きて 映像作家の記録したブラジル移民」（『日曜スペシャル』NHK、1998年放送）。

岡村淳（制作・構成・撮影・編集・報告）「郷愁は夢のなかで」（1998年制作、2001年改訂）、自主制作。

- 5) 岡村淳（制作・構成・撮影・編集・報告）「ブラジルの土に生きて」（2001年）、自主制作。
- 6) 岡村淳（構成・撮影・編集・報告）「60年目の東京物語 ブラジル移民女性の里帰り」（『映像記者報告』東京メトロポリタンテレビジョン 1996年放送）。
- 7) 岡村淳「日本放送協会会長への質問状」2007年（『岡村淳のオフレコ日記』
<http://www.100nen.com.br/ja/okajun/000051/20070125003076.cfm>）

参考文献

- 宮尾進．2002．『ブラジルの日系社会論集 ポーダレスになる日系人』サンパウロ人文科学研究所。
- ．2007．「近頃の世相で見る日系社会」（『サンパウロ新聞』2007年9月連載）。
- 岡村淳．2008．「人間、いかに生きるのか——移民の人生を追いつつ考える」（『オルタ』2008年1月号）、18-19ページ。
- ．2008．「移民を撮る 移民を書く」（『ラティーナ』2008年2月号より連載中）。